

を営む。18歳の時、水戸藩士久米長徳に師事し、後に尾崎助隆にも学ぶという、文化6年(1809)34歳の時、直江助政とともに水戸藩矢倉方細工人に登用された。晩年、上京し「近江守」を受領する。天保6年(1835)6月6日59歳で没する。作風は、よくつんで明るい小板目肌に尾崎助隆風の濤瀾刃を得意とし、水戸随一の刀工と評される。

### 関内徳宗

関内徳宗は、寛政7年(1795)に水戸近郊開江村の農家に生まれた。市毛徳鄰に学び、水戸城下において鍛刀する。天保12年(1841)、水戸藩に登用され、万延元年(1860)には文庫役に昇進した。明治6年(1873)79歳で没する。作風は、身幅広く、重ねの厚い豪壮な姿で丁字乱れの刃文を焼く。

徳宗は、作刀技術もさることながら、教育者として優れた能力を発揮し、関内徳兼、勝村徳勝、山本信義、黒沢徳正など多くの優れた刀工を育成した。

### 勝村徳勝<sup>のかつ</sup>

勝村徳勝は、文化6年(1809)に水戸で生まれた。天保9年(1838)関内徳宗に入門し、嘉永5年(1852)弟子正勝とともに江戸に出、石堂是<sup>シヤウ</sup>一や細川正義から鍛刀を学ぶという。水戸藩工として弟子とともに、水戸及び江戸小石川の水戸上屋敷鍛刀場において大量の刀剣を製作し、勝村刀は水戸刀の代名詞ともなった。明治5年(1872)2月29日64歳で没する。作風は、長大で重ねの厚い豪壮な姿で、柂目鍛えの地肌に直刃を焼く。

### 横山祐光<sup>のりかつ</sup>

横山祐光は、文政3年(1820)に江戸青山で生まれた。備前伝の鍛刀を学び横山祐光を名乗る。嘉永2年(1849)、松島へ旅行の途中水戸袴塚の勝村徳勝の鍛刀場に立ち寄り、作刀に協力する。技量の高さを認めた徳勝の推挙で水戸藩に仕え、八幡の白旗山において鍛刀した。明治6年(1873)7月13日54歳で没する。作風は、優しい姿で、板目鍛えの地肌に華やかな互の目丁字の刃文を焼く。

### 関善定家近則

関善定家近則は、水戸近郊の東前村の農鍛冶勘三郎の子。天保12年(1841)助川城で鍛刀の指導をしていた江戸の名工大慶直胤に入門。その後江戸に出て直胤に師事し、優れた技量を発揮する。徳川光圀時代の刀工関善定家吉門(坂東太郎莫正入道ト伝)の子孫を称して関善定家を名乗る。明治3年(1870)没する。作風は、板目鍛えのつんだ精良な地肌に直刃を焼く。

## 水戸刀の魅力

「水戸刀」の名があらわれるのは幕末期のことです。

水戸藩9代藩主徳川齊昭は、文政12年(1829)の藩主就任以来、藩政のゆきづまりと対外的危機の打破を目指し、天保の改革・安政の改革等、政治・経済・文化の各方面に亘る改革を積極的に推進していきました。同時に武備充実のため武具生産をも奨励し、齊昭みずからも藩の刀工直江助共等を相手に鍛刀し独自の八雲鍛を工夫するなど、刀剣の製作に熱意を注いでいます。安政3年には、現在の水戸市内の白簾山(八幡宮の西側一帯)に刀工や甲冑師・鉄砲鍛冶等を集めた武器製作所の建設を命じ、武具の生産に取り組みました。幕末水戸の、実用を目途とした護国の刀剣としての水戸刀は、このような時代背景のなかで成立したといえます。

水戸刀の魅力は、単に美的評価のみにとどまるものではありませんが、近世後期には直江助政・市毛徳鄰という美的水準の極めて高い刀剣を鍛える二人の名工が出現します。その道統は、関内徳宗、勝村徳勝を始め多くの水戸の刀工に引き継がれ、幕末から明治9年の廃刀令に至るまで、水戸刀の製作理念を踏まえた数多くの刀剣が製作されました。本展では、幕末水戸に活躍した刀工の名品と、水戸金工の手になる華麗な刀装具から水戸刀の魅力をご紹介します。

### <主要刀工紹介>

#### 直江助政

直江助政は、明和2年(1765)に生まれ、水戸台町で刀鍛冶を営む。30歳代の後半、大阪の尾崎助隆に学んだ。文化6年(1809)に水戸藩矢倉方細工人に登用される。その後御職人刀鍛冶となり傑出した技量を発揮する。作風は、身幅広く、重ねの厚い豪壮な姿で、刃文は、大阪新刀の名手井上真改風の湾刃を焼く。天保5年(1834)5月23日、70歳で没する。

#### 市毛徳鄰

市毛徳鄰は、安永6年(1777)に水戸近郊の開江村に生まれた。生家は代々農鍛冶